

論文内容の要旨

氏名	小谷 泰史
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	医第1003号
学位授与の日付	平成21年3月21日
学位授与の要件	学位規程第4条第1項該当
学位論文題目	Indications of laparoscopic myomectomy and efficacy of preoperative GnRHa therapy (腹腔鏡下子宮筋腫核出術(LM)の適応と術前GnRHa療法の有効性)
論文審査委員(主査)	教授 星 合 昊
(副主査)	教授 奥 野 清 隆
(副主査)	教授 細 野 真

【目的】		
子宮筋腫に対し、LMを行うことが増加している。その時に術前 GnRHa 療法を用いることがある。筋腫縮小や術中出血量の低下などの長所がある反面、手術時間延長や再発率上昇などの短所の存在が指摘されている。今回われわれは、腹腔鏡下子宮筋腫核出術(LM)の適応と術前 GnRHa 療法の有効性を検討した。		
【方法】		
1995年より2007年までに施行されたLMの161例を対象とした。その中で、術前 GnRHa 療法を4～6クール使用した(A群)58例と非使用群(B群)103例に分類した。当院で行われたLM症例の手術成績から、適応に関する検討を行った。また、術前 GnRHa 療法の有効性に関する検討も行った。さらに、LM後の再発率に関し、術前のMRIで確認できた筋腫個数と実際に核出した個数を比較した。その差がなく、数が一致していた一致群(I群)と予想筋腫個数より摘出筋腫個数が減少しており不一致群(II群)とに分類し、術後再発率を検討した。		
【結果】		
LMの手術成績は最大筋腫核径10cm以上の群で出血量、手術時間、開腹移行率が有意に増加し、個数に関してはすべての群で有意差はなかった。A群の体積の縮小率は43%であり、B群との間に手術成績に関して差を認めなかった。また、4年後の累積再発率はA群27.3%、B群25.8%と推定され、両者の間に差は認めなかった。再発率に関し、A群の中でI群12.1%、II群44.4%とII群で統計学的有意に術後再発率が増加した。一方、I群の中では、A群12.1%、B群14.3%と術後再発率に統計学的有意差を認めなかった。		
【考察】		
LMの適応は最大筋腫核径10cm未満、個数に関しては制限がないと考えられた。また、術前 GnRHa 療法は手術成績、再発率を悪化させる因子とはならず、手術適応の拡大の観点からみても有効であると考えられた。その場合MRIにて正確な術前の筋腫の状態を確認し、取り残すことなく手術を完遂することが、術後再発率低下に寄与すると考えられた。		
博士論文の印刷公表	公表年月日	出版物の種類及び名称
	2009年6月日 公表予定	出版物名 Acta Medica Kinki University Vol. 34 No. 1
	公表内容	2009年6月日 発行予定
	全文	

論文審査結果の要旨

【目的】子宮筋腫に対し、LMを行うことが増加している。その時に術前 GnRHa 療法を用いることがある。筋腫縮小や術中出血量の低下などの長所がある反面、手術時間延長や再発率上昇などの短所の存在が指摘されている。今回われわれは、腹腔鏡下子宮筋腫核出術 (LM) の適応と術前 GnRHa 療法の有効性を検討した。

【方法】1995 年より 2007 年までに施行された LM の 161 例を対象とした。その中で、術前 GnRHa 療法を 4~6 クール使用した (A 群) 58 例と非使用群 (B 群) 103 例に分類した。当院で行われた LM 症例の手術成績から、適応についての検討を行った。また、術前 GnRHa 療法の有効性についての検討も行った。さらに、LM 後の再発率に関し、術前の MRI で確認できた筋腫個数と実際に核出した個数を比較した。その差がなく、数が一致していた一致群 (I 群) と予想筋腫個数より摘出筋腫個数が減少しており不一致群 (II 群) とに分類し、術後再発率を検討した。

【結果】LM の手術成績は最大筋腫径 10cm 以上の群で出血量、手術時間、開腹移行率が有意に増加し、個数に関してはすべての群で有意差はなかった。A 群の体積の縮小率は 43%であり、B 群との間に手術成績に関して差を認めなかった。また、4 年後の累積再発率は A 群 27.3%、B 群 25.8%と推定され、両者の間に差は認めなかった。再発率に関し、A 群の中で I 群 12.1%、II 群 44.4%と II 群で統計学的有意に術後再発率が増加した。一方、I 群の中では、A 群 12.1%、B 群 14.3%と術後再発率に統計学的有意差を認めなかった。

【考察】LM の適応は最大筋腫径 10cm 未満、個数に関しては制限がないと考えられた。また、術前 GnRHa 療法は手術成績、再発率を悪化させる因子とはならず、手術適応の拡大の観点からみても有効であると考えられた。その場合 MRI にて正確な術前の筋腫の状態を確認し、取り残すことなく手術を完遂することが、術後再発率低下に寄与すると考えられた。

小谷君は内視鏡チームに所属し、多数例の手術成績の詳細な解析により上記の結論を得た。この論文は近年増加した LM の術前、術後管理に一定の指針を与えてくれるものであり、学位に値すると思われる。

氏名	武本昌子			
学位の種類	博士 (医学)			
学位記番号	医第 1004 号			
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 21 日			
学位授与の要件	学位規程第 4 条第 1 項該当			
学位論文題目	大腸癌原発組織の遺伝子発現プロファイル解析による異時性肝・肺転移の予測			
論文審査委員 (主査)	教授	塩	崎	均
(副主査)	教授	工	藤	正俊
(副主査)	教授	西	尾	和人